

### 小田原かなごてファーム小山田さんに聞く小規模営農型の今 kWhだけでないストーリーが消費者に評価

合同会社「小田原かなごてファーム」(神奈川県小田原市)を運営する小山田大和さん。古くから耕作放棄地解消や地域の脱炭素化に取り組んでおり、2021年1月には、ソーラーシェアリングの電力を自己託送にて電力源にする「農家カフェSiesta」を開業。その後も精力的にソーラーシェアリングに取り組んでいる。固定価格買取制度(FIT)の売電価格が下落し、高額な売電価格で農業収益に貢献する形が成立しづらくなる中、どのように利益を確保していくのか話を聞いた。

—昨年、Non-FITソーラーシェアリングについてお聞きしました。その後の動きは

小山田 自社案件として、神奈川県愛川町で40kWを1基建設しました。パネル下ではみかんを栽培しています。また、小田原市内にも92kWの案件を進行中、こちらもみかんです。このほか依頼を受け、南足柄町で約40kWを建設しました。こちらでは、事業者がさつまいもや里芋、落花生を栽培されています。

このほか、依頼を受けてコンサルタントもいくつか行いましたが、実現には至りませんでした。借地で地権者と折り合いがつかなかったことに加え、依頼者もリターンの判断で手を引きました。私は太陽光発電に携わるより前から耕作放棄地解消に取り組んでいたのが困難な事業でもやりがいを感じますが、儲けだけ考えたらソーラーシェアリングはやらない方がいいし、

やれないと思います。社会的意義が大切です。

コンサル案件では地方にも足を運びましたが、太陽光発電自体、あまり良いイメージを持たれていない印象です。ソーラーシェアリングも「太陽光メインで、農業はどうでもいいんでしょ」と思われてしまっています。

—FIT単価が下がると、事業運営は難しいのでは

小山田 私は、ソーラーシェアリングとNon-FITの相対取引は相性が良いと考えています。なぜなら、その裏にあるストーリーを評価してもらえるからです。

投資としてなら、FITを活用して野立てを開発した方が計画は立てやすいでしょう。ですが、ソーラーシェアリ



小山田さん

ング、特に私の取り組みは耕作放棄地を再生させつつ、再生可能エネルギーを増やす取り組みです。単に電力、kWhではなく、この点も評価いただき、Non-FIT案件では小売電気事業者のグリーンピープルズパワーに売電しています。FIT案件も、特定卸供給ですが、UPDATERの「顔の見える電力」で近隣のスターボックスや、地域の酒蔵「井上酒造」に電力供給しています。特に井上酒造では、私がパネル下で栽培したコメを使い、再生可能エネルギー電力+ソーラーシェアリング米で作る日本酒「推譲」も販売いただいています。

—その他、ストーリーが経済性を持つ事例は

小山田 耕作放棄地を再生させ、みかんを育てジュースにして販売する「おひるねみかんプロジェクト」は8年目になります。ジュースは年間2万本販売、そのほか、サイダーやゼリーといった新商品も開発しました。

最近取引先も増え、長くやり続け



小山田さんのソーラーシェアリング(写真は2号機)

ることが大事なんだと実感しています。一時期、政治スタンスの違いから小田原・箱根の老舗企業との取引がストップされ非常に苦しい時期もありました。しかし長年続けたことで商品やその裏のストーリーも広がり、その後、星野リゾート界箱根、東急リゾート、紫雲荘、つたやホテルなど、箱根の旅館に採用していただきました。観光客などに好評です。地域の外では、JR東日本の周遊型寝台列車「TRAIN SUITE四季島」にも採用された実績があります。

正直、おひるねみかんジュースは農薬不使用であれば180mlで500円と、一般的なみかんジュースより高額です。それでも、農薬不使用(黒ラベルのみ)、ストレート果汁100%といった要素に加え、耕作放棄地解消、放棄地を「おひるね」している土地と表現したネーミングなどをご評価頂いています。

私自身を評価してくださる方もいらっしゃるし、例えば、愛川町の40kW案件は金融機関からの融資が得られず、建設資金800万円を一般から募集したところ1日で目標達成となる金額までご応募いただきました。

2021年1月にオープンした「農家カフェSIESTA」。こちらは近隣に建設したソーラーシェアリングから、電力を既存の送電線を活用して自家消費するカフェです。

コロナ禍の真っ只中でしたが、発電所建設に環境省の補助金をいただいていたこともあり、開店せざるを得



おひるねみかんサイダーは果汁15%

なかつた経緯もあります。当初は厳しい売上でしたが、全国から私を訪ねてきてくださった方のおかげで売上も上がり、開店から1年半が経過した現在では一見さんも増え、経営状況が改善しました。みかんジュースと同じで、長くやると状況は変わるものです。

### 一資金調達は難しい？

**小山田** 世間的にSDGs金融が求められていることもあり、流れは変わってきたと思います。

小田原市の開発中案件は横浜銀行から融資いただける予定で打ち合わせを進めています。地銀としても「実績を作らなければ」と考えているのではないのでしょうか。私が出版した本もお読みいただいています(笑)。

Non-FIT案件は環境省の補助金もありますので、地銀としての融資額、リスクも小さくなります。オーナー側としては、見通しより少し余裕を持たせて補助金を申請し、余剰は後で精算する形にしないと、想定外の出費ができて事業が暗礁に乗り上げかねない、というのがこれまでの経験からの学びです。スムーズに進行できないと金融機関のリスクにもなります。

小田原市の環境部ゼロカーボン推進課も、補助金を新設した際に直接お話をいただくなど、大変親密に協力していただいています。脱炭素に前のめりという印象です。

一方、農政課を所管する経済部からは、ソーラーシェアリングや地域に無い農法について難色を示されることもあり、丁寧に説明しています。

### 一FEC+M自給圏構想を掲げている

**小山田** 地域で食べ物(Food)、エネルギー、福祉(Care)を自給しつつ、お金(Money)を循環させようという発想です。これまでF、Eに取り組んできましたが、パネル下の農業を障害者にお願ひする取り組みを始めました。特定



農家カフェSIESTA

非営利活動法人「おだわら虹の会」と提携し、障害福祉サービス事業所「ありんこホーム」の方々に、農作業やカフェでの接客をお願いしています。農福連携の具体的な動きです。

障害者の方々の賃金は一般の半分程度で、経営者としてのメリットがある点は否定しません。大変ありがたいです。一方で、例えばジュースのラベル張りの作業精度にバラつきがあったり、接客の際に意思疎通ができない、農作業で刃物が使えないなど、単に安い労働力として考えてはいけな面もあります。

また、こうした面から現実として定期的に障害者を雇用する団体は限られており、「ありんこホーム」の代表から、就労先が無いという相談を受けていました。農福連携の取り組みはSDGsの項目の1つである「誰一人取り残されない」を達成する手段にもなり得るため、フェアなやり取りを心がけています。今後はこの自給圏達成に向け、施設への電力供給も実施する予定です。

### 一今後の展望は

**小山田** 発電事業としては、1年で1基建設するペースで取り組みたいと考えていますが、最近の円安と燃料・資源価格の高騰がネックです。

FEC+M自給圏も、1つの形が出来上がりました。日本酒やみかんジュースもそうですが、SDGs実現を一つの軸に活動していくつもりです。その先ですが、以前に教師を志していたこともあり、教育に携われれば、と考えています。